

## 佐賀県の「田んぼダム」導入と持続可能で公正な社会

天気予報では、何故かよく「佐賀県全域、大雨洪水注意報、但し太良町を除く」とアナウンスされます。この本稿筆者の故郷の太良町をなぜ洪水注意報で除く、と報道するのが前から気になっていました。c

既に四年も前のことですが、この疑問に気付く機会がありました。「日の出の森・支える会」代表の瀬戸先生の講義で『森林や田畑は治水・土壌保全などの公益的価値も生産している』と聴いたからです。これこそ我が故郷が大雨でも洪水を免れている具体例ではないか！と嬉しくなりました。

と言いますのも太良町では町有林が多く、手を掛けて育てられた木材は、九州ではブランド化することに成功し、高値で取引されているようです。

この話こそ地元の人に聴いて欲しい。「皆さんが昔からやってこられた山林や水田の仕事は、こんなにも大切なことだったのですね！」と。

18歳で町を離れて東京で生活している者が、僭越かもしれないけれどエールを送る気持ちで、早速講演会を企画し、瀬戸先生には佐賀県太良町までご無理をお願いして、演題『持続的で公正な環境への農山村の価値』を話していただきました。この日聴講された農林漁業の人たちが、「自分たちの仕事に別の側面の価値があることもよくぞ話して下さった」と、とても喜んでくれました。この町は農林水産業が中心の過疎と高齢化が深刻な町ですが、山と海の自然に恵まれています。それを大切にすることが、治水や防災の役割も果たすということを実証する町でもあるのかも知れません。

### 治水防災にも約立つ『持続可能で公正』な取り組みは、未来への責任も果たす

さて、自然の林野や田畑の持つ治水・土壌保全のソフトで持続可能な能力と、ハードなコンクリートによる強引な治水効果を比べてみましょう。瀬戸先生の最近のコラムから引用しますと『国は春日部市に、貯水量 67 万トンの治水のための地下ダム（首都圏外郭放水路）を約 2300 億円で建設した。これによって下流の都市への洪水害を減らそうとしている』とあります。

かたや今回の佐賀県の持続的な地域の「田んぼダム」の予算は 80 万トンの規模で、『県は木製のせき板 3,200 枚分の費用や、農家への 10 アール当たり 2 千円の協力金を 2022 年度一般会計当初予算案に計上した』そうです。

ほぼ同じ規模の貯水効果の地下ダムの年間維持費は、その建設費の十分の一の 230 億円と仮定します。佐賀県の予算では農家への 10 アール当たり年間 2 千円の協力金だけとのこと。80 ヘクタールでは千六百万円。春日部の地下ダムの年間維持費のごく僅かの 0.07%、千四百分の一で済みます。農家が 1 ヘクタールの水田を耕すと、お米が約 5,000 キロで、売値が 300 円とし



て150万円の収入になる。さらに今回の佐賀県の田んぼダムへの協力金2万円が加算されるよ

うです。

この方法は行政的には治水対策費用がう〜んと安くあがり、下流の住民には安心と安全をもたらすだけでなく、日本人の主食、お米もつつがなく収穫され、豊葦原の瑞穂の美しい環境と水田の風景が保全されていけるのですから、一挙兩得どころの話ではありません。

それがCO2削減、地球温暖化対策、農林業での雇用の創出、過疎化と高齢化対策にもなり、一石二鳥も三鳥どころか、もっとたくさんの効果をもたらし、子々孫々未来への責任も果たせます。

これに反してコンクリートの地下ダムは、税金でお役人の雇用受け皿と利権政治家とゼネコンを潤すだけで、何ら付加価値を生むことはありません。いざ大雨洪水となると、ダムの排水ポンプは膨大な電力を消費し、発電所でCO2を増大させこそすれ、1gもそれを吸収することはありません(それどころか、鉄筋やコンクリート資材など建設に係るCO2の排出は莫大なもの)。金銭面だけで見ても、80ヘクタールの水田でCO2削減効果はおよそ800トンになり、これをEU排出権なみの価格で取引すると、5千万円。稲の吸水量はひと夏で32万トンとなり、この気化熱は1,73億kcal。これをエアコンで2度冷やすとなると、電気料金は1千万円に上るでしょう。コンクリートの箱モノと違って、一番大きく異なる点は、それは未来へ繋がる持続可能な大きなやさしい自然の入れ物で、付加価値を生み出します。もし洪水が発生した場合の経済的損失は、春日部の下流にある巨大都市東京と佐賀県の場合では規模が違いますが、同じ治水対策が期待できるので、『田んぼダム』への協力金はもうちょっと奮発してもよろしいのではないかと。そうすることでちょっとは公平、公正に近づけると思うのは、筆者だけでしょうか。

(文責:古澤省吾)

「佐賀県田んぼダム」「春日部コンクリートダム」 経済・環境貢献度比較			
比較項目	佐賀県	春日部	損益比較
貯水量(万トン)	80	67	13
建設費(億円)	0.16	2300	2299.84
年間維持費(億円)	0.16	230	229.84
<b>農家と環境の受益価値</b>			
米生産(150 x 80h)(億円)	1.2	0	1.2
県からの協力金(億円)	0.16	0	0.16
CO2削減量(10t/h当り)(トン)	800	0	800
EU排出権(8千円/t取引億円)	0.512	0	0.512
稲の吸水量(一夏4千t/h万トン)	32	0	32
稲の気化熱(一夏80h億kcal)	1734	0	1734
稲の気化熱分の冷房電気料金(億円)	0	0.1	0.1

## 「台風19号でハッ場ダムが利根川を救った」はフェイクニュース

嶋津暉之

台風19号(2019年10月12-13日)は空のハッ場ダムをいっきに満水にした。「ダムが下流の洪水を防いだ。ダム反対者は反省しろ」の声がかましい。

これに対して、以下の声も聞こう。

堤防は計画高水位(9.90m)より2mの余裕があった。したがって、ダムがなくとも利根川中流部は氾濫しなかった。下流部(取手、茨城県)は浸水したがダムによる最大流量の削減率は1%程度であったから、ダムがあろうと浸水は避けられなかった。けっきょく、浸水は、ダムではなく、堤防をあげれば避けられた(TOMORROW Vol.39, pp4-5, 2019年12月)。

(上記紹介者:瀬戸昌之 支える会代表)